

窓辺

まえだ
前田 隆平

言葉の持つ美しさ

言葉というものに魅力を感じることがよくある。優れた文学者の文章は時として荘厳にさえ思えてくるし、まさに美しさを極めた芸術である。

これは日本語に限ったことではなく、外国語についても共通している。小説などは原文で読まないと本当の良さは分からないと言われるが、一般的に翻訳を通じてその言語固有の美しさを伝えることが難しいからであらう。

しかし、これにも例外があるのが、言葉の面白さである。例えば「風と共に去りぬ」。「Gone with

the Wind」の直訳であるが「去りぬ」という文語が素晴らしい余韻を感じさせてくれる。一方、007シリーズ最高傑作とされる「ロシアより愛をこめて」。「From Russia with

Love」のwithを「共に」ではなく、「こめて」と訳したのはどこの天才であらうか。これらの邦題は英語の原題を凌駕している。

日本語の英訳にも秀逸なものがある。「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」。日本語特有の主語の省略が生きた川端康成

の「雪国」のこの冒頭を、サイデンステッカーは次のように訳している。「The train came out of the long tunnel into the snow country」。さりげない訳であるが、声に出して読むと、誰もが英語という言語の美しさを感じるはずである。

言葉は意思伝達や表現の重要な手段である。しかし、それは手段というものを超えた奥の深いものであることは間違いない。奥深さ故、普段使っていないがなかなか気付きにくい言葉の持つ美しさであるが、私自身は引き続きその美しさを鑑賞し、楽しみたいと思っている。

(前スイス大使)